

歴史資料『板東俘虜収容所関係資料』にみる ドイツ軍俘虜の音楽活動

Music Activity in Historical Data “A Prisoner-of-War Camp of
German Force in Bando, Tokushima Prefecture JAPAN”

岩 井 正 浩
Masahiro IWAI

1. はじめに

徳島県は「歴史資料『板東俘虜収容所関連資料』」を県指定有形文化財として2008年3月28日に指定した。板東俘虜収容所はベートーヴェン作曲《交響曲第9番》の全曲演奏を日本初演したことで知られている。第4楽章の女声パートを男声用にアレンジし、ファゴットの代りにオルガンを使用するなど、苦心した演奏であった。

第一次世界大戦（1914～1919）で俘虜となった中国青島のドイツ軍は、1914（大正3）年10月から12月にかけて日本各地の収容所に収容された。その後1918（大正7）年までに千葉県習志野、愛知県名古屋、兵庫県青野ヶ原、徳島県板東、広島県似島そして福岡県久留米の6箇所に整理統合された。^(註1)

久留米、習志野と共に1,000名を超す板東のドイツ軍俘虜は、1917年9月から1919年3月の間、板東収容所新聞『ディ・バラッケ』（『Die Barache』）^(註2)を刊行した。その内容は鳴門市が作成した『板東俘虜収容所関係資料』に、新聞（31点）、書籍（66点）、絵はがき（42点）など300点の印刷関係資料として整理されている。これは国内の他のドイツ軍俘虜収容所を圧倒的に上回る規模である。中でもプログラム類は群を抜いている。演劇（16種23点）、娯楽演芸会、講演会、スポーツプログラムはもとより、16種102点にのぼるコンサートプログラムは、総数の3分の1に及んでいる。^(註3)これはドイツ軍俘虜が自国のネイティブな音楽を表現したいという主体的欲求から行われた活動であり、その演奏は地元徳島県民にも提供されたばかりではなく、県民への音楽レッスンまで行われている。二十世紀初頭に日本の一地方である徳島県板東（現鳴門市）で展開された音楽活動は、極めて重要な意義と意味をもち、近代音楽史上特筆されるものである。

筆者は徳島県文化財保護審議会委員として板東俘虜収容所の膨大な関係資料の中から「印刷物」に限定し、県指定の「有形文化財」（歴史資料）として指定する作業の中で分析を進めてきた。本稿は拙著「四国3収容所におけるドイツ軍俘虜の音楽活動」^(註4)において論述した四国

の徳島県徳島、香川県丸亀、愛媛県松山の各収容所における音楽活動に関する考察に引き続き、統合された徳島県鳴門市の板東俘虜収容所の音楽活動についての論考である。筆者は四国の3俘虜収容所における音楽活動を精査する中で、後の板東俘虜収容所での音楽活動は、すでにこれら3俘虜収容所の中で生み出されていた成果に立脚するところが大きいことを明らかにしてきた。

板東俘虜収容所の音楽活動で特筆されることの一つは、板東収容所新聞『ディ・バラッケ』に、制作されたプログラムが最大5色刷の謄写印刷で発行されていることである。ただ残念なことに当時使用した楽譜資料は残されていない。中でもベートーヴェン作曲《交響曲第9番》第4楽章合唱部分の女声パートを男声パートにアレンジした楽譜が存在していないことは惜しまれる。一方、当時のピッチに関してはドイツ軍俘虜から譲り受けた3丁のヴァイオリンとそのケースに所蔵（門市ドイツ館に保存）されていた調子笛（Violin Tuner）から判明することができた。ピッチは $A=432\text{Hz}$ で、これは1815～21年のドレスデン歌劇場の音叉（ $A=423.7$ ）と、シュツットガルト標準音（ $A=440$ ）^(註1)の中間音に近い。このピッチは19世紀中葉の標準であり、ドイツ軍俘虜が使用していたヴァイオリンは現在とは違う低いピッチで奏されていたことが判明する。

本タイトルに関する先行研究として、富田弘氏の『板東俘虜収容所』（法政大学出版局 2006年）をはじめ、林啓介氏たちの貴重な研究がある。本稿はこれらの成果を踏まえて「歴史資料『板東俘虜収容所関連資料』」に基づき、音楽活動を分析することを目的とする。

2. 県指定有形文化財「歴史資料『板東俘虜収容所関連資料』」指定の経緯

2006年2月22日の「平成18年度第3回徳島県文化財保護審議会」で報告事項として『板東俘虜収容所に関する資料』が上程された。2006年12月14日には鳴門市教育委員会教育長古林勢一氏から徳島県教育委員会委員長宛に、板東俘虜収容所に関する資料を県指定文化財として申請する「意見書」が提出された。これに前後して「徳島県指定有形文化財指定申請書」における「資料収集の由来」で亀井俊明鳴門市長が以下のように申請をされた。

〔資料－1 「資料収集の由来」〕

1920（大正）年4月1日に閉鎖された「板東俘虜収容所」内では、積極的な文筆活動や創作活動が行われてきた。その成果として所内新聞である『バラッケ』や演奏会プログラム等、所内の印刷所での出版物や、工芸品・書画の制作があげられる。これらの多くは俘虜が帰国の際に持ち帰られたが、1960（昭和35）年に「ドイツ兵の慰霊碑」の清掃活動が続けられている事を新聞報道で知ったドイツ大使のW. ハース夫妻と神戸領事館ベルーガ夫婦が当時の大麻町を訪れたことにより、ドイツとの交流の再開と大麻町（当時）への資料類の寄贈が始まった。この交流は活発化するとともに、寄贈された資料を保存活用する施設「ドイツ館」の建設機運も高まり、1964（昭和39）年に「ドイツ記念館建設期成会」が発足、1972（昭和47）年に「鳴門市ドイツ館」が完成する。開館後も元俘虜やその遺族、資料を所有している日本人関係者からの寄贈が続いている。また、海外のオークションに出品された資料についても積極的に収集し、印刷物252点（所内印刷所での制作物、書籍73点・プログラム143点・その他36点）、制作品66点（工芸品20点（大谷焼・木工細工・家具）・書画3点・写真アルバム7点・その他36点）、計

318点が保存活用されている。

現在、寄贈資料は、1993（平成5）年10月に完成した現在のドイツ館で保存活用され、一部の資料展示公開されるとともに、所内新聞である『バラッケ』の翻訳（日本語・現代ドイツ語）作業を進める等、資料のさらなる価値付けをするための作業を進めている。

上記のものを、徳島県指定有形文化財に指定して下さるようお願いします。

平成18年12月13日

その後鳴門市ドイツ館などでの調査を重ねながら2007年7月20日の「平成19年度第1回徳島県文化財保護審議会」では協議事項として、更に2007年12月21日の「平成19年度第2回徳島県文化財保護審議会」では、再度協議事項として議事提案された。新たに報告された資料は、「板東俘虜収容所関係資料 新旧比較表」「協議対象資料」「ジャンル別の内訳」「新しい番号の添削」で、前回の331点から300点に修正した。その中でプログラム関係の点数は以下の通りである。

〔表－1 ジャンル別の内訳〕

作成：岩井正浩

| ジャンル | 総点数 | 展示点数 | 保管点数 |
|------------|-----|------|------|
| コンサートプログラム | 103 | 9 | 94 |
| 演劇プログラム | 23 | 4 | 19 |
| 娯楽演芸会プログラム | 10 | 1 | 9 |
| （講演会）プログラム | 2 | 1 | 1 |
| スポーツプログラム | 4 | 3 | 1 |
| 小計 | 142 | 18 | 124 |

報告事項、協議事項（2回）を経て、2008年3月14日の「平成19年度第3回徳島県文化財保護審議会」で、「有形文化財（歴史資料）『板東俘虜収容所関係資料』」が審議事項として徳島県教育委員会から諮問された。私を含む2人の調査委員が2008年3月6日に提出した「調査票」は以下の通りである。

〔資料－2 「調査票」（一部省略）〕

〔名称・員数〕 板東俘虜収容所関係資料300点

〔管理者氏名〕 鳴門市ドイツ館

〔法量・形状、伝説由来、年代・現状、材質その他〕

板東俘虜収容所関係資料300点。板東俘虜収容所は第一次世界大戦期に鳴門市大麻町、当時の板野郡板東町に造られた俘虜収容所で、ドイツの租借地であった青島で日本の捕虜となったドイツ兵のうち、約1,000名を収容したもので、大正6年（1917）から大正9年（1920）まで使用された。所長は松江豊寿陸軍中佐（1917年以後大佐）で、俘虜に対して人道的かつ寛大な処遇をしたことや、ベートーヴェンの交響曲第9番が日本で初めて全曲演奏されたことで有名。収容所内では様々な生産活動や芸術文化活動が行われ、収容所内印刷所では『Die Barache』（ディ・バラッケ）の印刷が行われた。資料の多くは帰国の際に持ち帰られたが、昭和35年（1960）に地元住民による「ドイツ兵の慰霊碑」清掃活動が報じられたことがきっかけで、資料の寄贈が始まった。

本資料は多数ある関係資料のうち、鳴門市の資料整理により板東俘虜収容所内で製作されたことが明確である印刷物に限定されており、新聞や書籍をはじめ、コンサートや演劇・スポーツ等のプログラム、絵はがきや切手が含まれている。

[指定基準]

(有形文化財(歴史資料))

1. 政治、経済、社会、文化、科学技術等本県の歴史上の各分野における重要な事象に関する遺品のうち学術的価値の特に高いもの
3. 本県の歴史上重要な事象又は人物に関する遺品で、歴史的又は系統的にまとまって伝存し、学術的価値の高いもの

[調査者の意見] (岩井執筆部分)

『板東俘虜収容所関係資料』は、新聞(31点)、書籍(66点)、絵はがき(42点)など300点の関係資料が整理されており、他の国内のドイツ軍俘虜収容所を圧倒的に上回る規模である。中でもプログラム類は群を抜いている。演劇、娯楽演芸会、講演会、スポーツプログラムはもとより、102点のコンサートプログラムは、総数の3分の1に及んでいる。ベートーヴェン作曲《交響曲第9番》の本邦初演をはじめとする収容所での音楽活動は、明治維新前後から移入されてきた洋楽導入のベクトルを大きく塗り変えた。つまりドイツ軍俘虜が自国のネイティブな音楽を表現したいと主体的欲求から行われた活動であり、その演奏は徳島県民に提供されたばかりではなく、県民への音楽レッスンまで行われている。二十世紀初頭に日本の一地方・徳島で展開された音楽活動は、極めて重要な意義と意味をもち、『板東俘虜収容所関係資料』は、近代史の第一級資料である。

鳴門市は、1971年10月から1918年3月の間刊行された板東収容所新聞“Die Barache”を、ドイツ語版とともに4巻におよぶ日本語版『ディ・バラッケ』として刊行した。さらに2007年12月に作成された『板東俘虜収容所に関する資料台帳』は、綿密で緻密な資料である。今回は膨大な関係資料の中から板東俘虜収容所での「印刷物」に限定したが、これだけでも県指定の「有形文化財」(歴史資料)としての価値は非常に高い。今回の指定後、さらに板東以外での印刷物や手紙類、写真類などについて継続的な精査を実施し、追加指定を行っていく必要があり、こうした取り組みは国指定への第一歩として位置づけることが可能である。

以上、報告事項、協議事項(2回)、そして今回の審議事項を経て、「歴史資料『板東俘虜収容所関連資料』」は徳島県指定有形文化財として指定された。

3. 板東俘虜収容所関係資料

印刷物に限定して指定された300点の資料は、鳴門市によって詳細な分析と整理が行われている。それは資料仮 No. 分類1、2、名称(ドイツ語)、和名、材質、寸法、版、頁数、装丁、印刷方法、著者名、編集者、発行者、発行年月日、発行年月日2、備考、寄贈者、所有者住所、寄贈者住所、制作者名、という項目に分けられている。音楽関係のコンサートプログラムは、資料仮 No.の103から206番まで102件掲載されている。さらに演劇プログラムおよび娯楽演芸会プログラムが No.206から238まで掲載されているが、ほとんどのプログラムに音楽が演奏されたことが備考欄に記されている。

3-1 音楽プログラムに見る演奏曲目の特徴

板東俘虜収容所での音楽活動は、統合されるまでの四国3収容所（徳島、丸亀、松山）における活動が大きな支えになっていた。中でもハンゼン指導による徳島収容所、エンゲル指導による丸亀収容所での音楽活動は板東俘虜収容所での中軸として機能した。ハンゼン（Hermann Richard Hansen）^(註6)率いる徳島オーケストラは15回、その後 M.A.K オーケストラ（Matrosen-Artillerie-Detachment Kiautschou 膠州海軍砲兵大隊）と名称を変更し35回開催している。そして1919年12月7日の「さよならコンサート」で、1917年4月17日の第1回コンサートから2年8ヵ月の演奏活動を終えた。また管楽器編成（吹奏楽）では、M.A 吹奏楽団という名称で活動している。1918年6月1日に演奏された、ベートーヴェン作曲《交響曲第9番》の全曲演奏もハンゼン指揮の徳島オーケストラ第2回シンフォニー・コンサート（通算第18回）によるものである。

一方、エンゲル^(註7)率いるエンゲル・オーケストラは、1917年5月13日に第1回コンサートを、そして1919年10月20日の第18回コンサートまで2年5ヵ月の演奏会を開催している。さらに M.A.K オーケストラとの合同演奏会を2回（1919年11月10日、12月1日）開催している。

音楽演奏団体はハンゼンとエンゲルのオーケストラばかりではなく、さまざまな団体が結成され、活発な活動を繰り広げた。それらはマンドリン楽団（2回）、シュルツ（Schulz, Adolf）オーケストラ（3回）^(註8)、シュルツ吹奏楽団、ⅢSB 吹奏楽団（6回：帰国船での演奏を含む）、「室内楽の夕べ」（8回）、「歌の夕べ」（2回）、ⅢSB 第六中隊による軍楽隊儀礼演奏、モルトレヒト男声合唱団（2回）^(註9)、ヤンセン（Janssen, Peter）^(註10)合唱団、「朗読と音楽の夕べ」、「和洋大音楽会」である。わずか2年7ヵ月の間にこれほどの音楽活動が行われたことは驚嘆に値する。

音楽活動は音楽表現にとどまらず講演も行なわれている。収容所新聞『ディ・バラッケ』には講演記録が掲載されている。この新聞活動が俘虜の音楽活動を大きく支えた。コンサートプログラムの掲載、演奏会評そして講演内容などが語られている。これも板東俘虜収容所に統合される前の四国3収容所（徳島、丸亀、松山）での新聞発行演奏活動が発展的に継続されたものであった。

拙著「四国3収容所におけるドイツ軍俘虜の音楽活動」^(註11)では、徳島俘虜収容所新聞『Tokushima Anzeiger』、丸亀俘虜収容所新聞『Das Marugamer Tageblatt』、そして松山俘虜収容所新聞『Das Lagerfeuer』におけるコンサートプログラムと演奏会評について論じたが、板東俘虜収容所で発行された『ディ・バラッケ』にも多くのコンサートプログラムと音楽講演記録が掲載されている。主なものとしてはボーナー（Bohner, Hermann）二等兵による『ドイツの歴史と芸術』の34回連載講演である。^(註12)講演では多面的な芸術論の中で、1918年3月30日の「バッハ、ヘンデル」、同年4月17日の「J.S.バッハのブンランデンプルク協奏曲」、5回のシェクスピア論、そして1918年6月1日に演奏された《交響曲第9番》についての2度の講演「ベートーヴェン《交響曲第9番》について」（1918年5月28、30日）である。また日本の祭りについての講演もある。『Tokushima Anzeiger』にも徳島の阿波踊りや天神祭、正月、盆行

事などが紹介されていたが、5月31日にはマイスナー (Meissner, Kurt)^(註13)二等歩兵によって「日本の日常生活と祭り」が掲載されている。

3-2 作曲者群にみる時代的・地域的特徴

「歴史資料『板東俘虜収容所関連資料』」をひも解くと、全300点の資料の中でコンサートプログラムが102点、一部音楽演奏も内包している演劇プログラムが引き続いて32点掲載されている。プログラムの重複があるのは印刷物資料を対象とした指定のため、プログラムの重複をそのままカウントしたためである。このことは俘虜にとって収容所内での音楽活動が非常に大きな位置を占めていたことを物語っている。備考欄には世界各地からの資料の購入が記されており、鳴門市ドイツ館が大きな努力を払って資料を収集したことがうかがえる。

地域的にはドイツ、オーストリア、イタリア、フランス、ハンガリー、チェコスロヴァキアなど中・西部ヨーロッパの作曲家作品が数多くを占めている。また時代的には19世紀後期～20世紀が43%、19世紀が36%、18世紀後期～19世紀前期が14%となっていて、全体の93%を占めている。この中でも19～20世紀が8割に至っていることは、俘虜の親と同世代、さらには俘虜との同世代の作曲家の作品が圧倒的に多いことを物語っている。つまり地域的・時代的にもっとも身近な作曲家の作品を彼らは親しみ、表現していたことになる。それは147名中21名の履歴判別不明の作曲家(2011年1月現在)が存在していることにも表れており、一般的に認知されていないが彼らにとっては身近な作曲家の作品であったと思われる。

3-3 作品群に見る特徴

四国3収容所から板東に統合された俘虜は、様々な音楽団体を継続もしくは新たに結成し、意欲的な音楽表現活動を展開していった。1,000名規模の収容所で前述のような数多くの団体が演奏活動を展開していたこと自体、ドイツ軍俘虜が高度な音楽演奏技術と音楽嗜好を有していたことが伺える。それはハンゼンやエンゲルのように、上海音楽院でオーケストラ活動をし、統合前の徳島収容所や丸亀収容所で指揮とヴァイオリン演奏を行っていたことに代表される音楽専門家が存在していたことである。さらに収容所で初めて楽器を始めた俘虜、楽器の製造、神戸在住のラムゼガー (Ramseger, H)^(註14)などによる資金援助、そして板東俘虜収容所の松江豊寿所長の俘虜への配慮、その副官であった高木繁がドイツ語に堪能であったことも大きい。^(註15)

作品群で圧倒的に多いのは行進曲である。軍隊という集団における音楽であるということから当然とも推測され、ドイツ人であるタイケ、イエッセル、エンゲルの作品は特に数多く演奏されている。

(以下表2～6の演奏回数は省略)

[表-2 行進曲作品群]

作成：岩井正浩

| 作曲者名 | 作品名 |
|--|--|
| イエッセル (Jessel, Leon) | わが祖国ドイツ、月光の魔力、コロラド河畔にて、ヨーク行 行進、バラの結婚行進曲、市の番兵の行進 |
| エンゲル (Engel, Paul) | ステヘル大尉行進曲、青島の戦士 |
| タイケ (Teike, Carl Albert Hermann) | 剛毅潔白、忠節を重ねて、さあやろう、プロイセン行進曲、 皇帝宣言、ドイツの忠誠、アルブレヒト皇太子行進曲、ツェッ ペリン伯行進曲、皇帝出御、戦友のなかで、真心に真心 |
| ブランケンブルク (Blankenburg, H.L.) | 剣闘士の別れ、 |
| アイテル・フリードリヒ公 (Friedrich von Preußen, Eitel) | 我々をたじろがせるものはない、アイテル・フリードリヒ皇 太子 |

また当時のプロイセン王国を賛美した作品も演奏されているが、プロイセン王国が収容所時
期の1918年11月9日に崩壊する直前という状況下での演奏でもあった。

次に多いのは序曲である。この作品群は日本でも認知されている作曲家作品、中でもオペラ、
オペレッタの序曲が数多い。

[表-3 序曲作品群]

作成：岩井正浩

| 作曲者名 | 作品名 |
|---|----------------------------|
| アーダム (Adam von Fulda) | ニュールンベルックの人形 |
| R.ヴァーグナー (Wagner, Richard) | オペラ『リエンチ』、オペラ『さまよえるオランダ人』 |
| ヴェルディ (Verdi, Giuseppe) | オペラ『トルヴァドゥール』 |
| ウェーバー (Weber, Carl Maria) | オペラ『魔弾の射手』、祝典序曲、オペラ『オベロン』 |
| オベール (Auber, Daniel-Francois-Esprit) | 左官と鍵屋、オペラ『ポルティーチの哑娘』 |
| オッフェンバック (Offenbach, Jacques) | オペレッタ『冥界のオルフェウス』(天国と地獄) |
| キースラー (Kiesler, Ed.) | アマゾネス |
| グノー (Gounod, Francois) | オペラ『ファウスト』 |
| ケーラ・ベラ (Keler, Bela) | ハンガリーの喜劇 |
| J.シュトラウス (Strauß, Johann) | オペレッタ『ジプシー男爵』 |
| シューベルト (Shubert, Franz) | ロザムンデ序曲 |
| スッペ (Suppe, Franz) | オペレッタ『愉快的仲間』・『詩人と農夫』・『軽騎兵』 |
| トーマ (Thomas, Ambroise) | オペラ『レーモン』、ガボット |
| ベルリーニ (Bellini, Vincenzo) | オペラ『ノルマ』 |
| ベルリオズ (Berlioz, Hector) | ローマの謝肉祭 |

| | |
|--------------------------------------|--|
| ベートーヴェン (Beethoven, Ludwig van) | バレエ『プロメテウスの創造物』、オペラ『フィデリオ』、『レオノーレ』序曲第3・4番、アテネの廃墟、エグモント |
| ボワエルデュー (不明) | オペラ『白衣の婦人』 |
| モーツァルト (Mozart, Wolfgang Amadeus) | オペラ『フィガロの結婚』 |
| ライネケ (Reinecke, Carl) | 平和祝祭序曲 |
| ラムゼガー (Ramseger, H) | 『忠臣蔵』から前奏曲・序曲 |
| ロルツィング (Lortzing, Albert) | 刀鍛冶、皇帝と舟大工 |
| ロッシーニ (Rossini, Gioacchino) | オペラ『ウィリアム・テル』・『セビリアの理髪師』 |

3つ目は彼らの娯楽でもあったワルツである。

[表ー4 ワルツ作品群]

作成：岩井正浩

| 作曲者名 | 作品名 |
|------------------------------------|--|
| イエッセル | バラの輪 |
| ヴァルトトイフェル (Waldteufel, Emil(e)) | いつもか決して、とてもかわいい、ベラ・マズルカ、スケーターワルツ |
| グングル (Gungl, Joseph) | キュービッドの踊り、論戦ワルツ |
| コムツァク (Komzak, C.) | バーデンの娘、わがバーデン |
| J.シュトラウス | 春の声、オーストリアの村ツバメ、美しき青きドナウ、オペレッタ『こうもり』から《君と君》、男声合唱のための《美しき青きドナウ》、トランスアクチオン、芸術家の生活、ウィーンの森物語、南国のバラ、おお美しい五月、朝刊ワルツ、宝のワルツ、恋人のワルツ人気曲メドレー |
| ツェラー (Ziehrer, Carl Michael) | 怒らないで |
| ファル (Fall, Leo) | アンナ どうしたの?、オペレッタ『離婚した女』の動機によるワルツ《おまえは踊れるよ》 |
| ブラガ (Braga, Gaetano) | レジャンド・ヴァラク |
| ミレッケル・オスカー・シュトラウス | バーデンの娘 |

以上、ある程度軍隊生活と娯楽に適した曲目に加え、大編成の作品として交響曲、協奏曲、管弦楽曲も演奏されている。これらはドイツ国外でもよく認知されている作品である。

[表ー5 交響曲、協奏曲、管弦楽曲]

作成：岩井正浩

| 作曲者名 | 作品名 |
|-------------------------------|--------------------------------|
| R.ヴァーグナー | 楽劇『ワルキューレ』抜粋、『タンホイザー』より《巡礼の合唱》 |
| ヴィエニャフスキ (Wieniawski, Henryk) | ヴァイオリン協奏曲第2番 |

| | |
|------------------------------------|---|
| グリーク (Grieg, Edvard Hagerup) | 『ペールギュント組曲』 |
| サン・サーンス (Sant-Saens, Camille) | 交響詩《死の舞踏》 |
| シャルヴェンカ (Scharwenka, Philipp) | 交響詩《春の波》 |
| ジーデ (Siede) | 間奏曲 |
| シューベルト | 未完成交響曲 |
| J.シュトラウス | オペレッタ『コウモリ』、『ジプシー男爵』メドレー、 |
| チャルディ (Ciardi. C.) | ロシアの謝肉祭 |
| ドリーブ (Delibes, Leo) | バレエ組曲『コッペリア』・間奏曲とワルツ、バレエ音楽『シルヴィアのピッチカート』 |
| ドヴォルジャーク (Dvorak, Antonin) | ユーモレスク |
| ハイドン (Haydn, Joseph) | 交響曲第2・6番 |
| ブルッフ (Bruch, Max) | ヴァイオリン協奏曲 |
| ブラームス (Brahms, Johannes) | ハンガリー舞曲第5, 6番 |
| フックス (Fux, Johann Joseph) | オペラ『グッテンベルク』から《第3フィナーレ》 |
| ベートーヴェン | 交響曲第9番から第4楽章「歓喜に寄す」、交響曲第1、4、5、6番、交響曲第9番、ヴァイオリン協奏曲 |
| マスカーニ (Mascagni, Pietro) | オペラ『カヴァレリア・ルスティカーナ』抜粋 |
| メンデルスゾーン (Mendelssohn, Felix) | ヴァイオリン協奏曲 |
| モーツァルト | オペラ『魔笛』抜粋 |
| リスト (Liszt, Franz) | ハンガリー狂詩曲 第2番、交響詩《レ・プレリュード》、交響詩《フン族の戦い》 |
| レオンカヴァレロ (Leoncavallo, Ruggero) | オペラ『道化師』抜粋 |
| J.S.バッハ (Bach, Johann Sebastian) | ブランデンブルク協奏曲第3番 |

1918年6月1日に演奏されたハンゼン指揮、徳島オーケストラ第2回シンフォニー・コンサート(通算18回)での《交響曲第9番》全曲演奏は、ソリストおよび合唱団全員男声、ファゴットの代用としてオルガンを使用して行なわれた。その時の編成は、

第1ヴァイオリン=8、第2ヴァイオリン=7、ヴィオラ=5、チェロ=6、コントラバス=3、フルート=2、オーボエ=2、クラリネット=2、ホルン=2、トランペット=3、トロンボーン=1、打楽器=2、オルガン(ファゴット代用)、合唱80名^(註6)

そして男声ソリストは、K.Wegner, S.Steppan, K.Frisch, U.d.Law.II.Koch であった。

〔資料-3〕ベートーヴェン第9交響曲初演ポスター 〔鳴門市ドイツ館所蔵〕巻末

〔資料-4〕ベートーヴェン第9交響曲初演プログラム 〔鳴門市ドイツ館所蔵〕巻末

プログラムの最後で「Bitte nicht Rauchen!」と注意を促しているのは、火事への予防だけではなく、演奏への集中、そしてベートーヴェンとシラー(Schiller, Johann Christoph Friedrich

von)への尊敬が込められていたと察せられる。このコンサートには全曲上演までの一定のプロセスがあった。ハンゼンが徳島収容所で音楽活動をしていた1916年8月20日付の『徳島新報』(Tokushima-Anzeigaer)には「わが楽団の第50回コンサートに向けて」というタイトルで、『交響曲第9番』「第4楽章」が紹介されている。^(註17)

その後板東俘虜収容所に移動した1917年1月10日には徳島オーケストラ第5回コンサートで、再度「第4楽章」のみの演奏を行なっている。さらに前日の5月31日には公開の総合稽古を行っており、2度の講演「ベートーヴェン《交響曲第9番》について」と合わせ、「交響曲第9番」上演になみなみならぬ姿勢が表れている。^(註18)これはシラーの理想を掲げたドイツ文化の優越性を確認するための一大イベントでもあった。

個人の演奏技術が発揮される室内楽としては主として以下の作品が演奏された。(演奏回数は省略)

[表-6 室内楽群]

作成：岩井正浩

ピアノ独奏曲

| 作曲者名 | 作品名 |
|---------------------------------------|---------------------------------------|
| ベートーヴェン | ソナタ op.12-2 op.14-2、op.10-3、op.13「悲愴」 |
| ショパン (Chopin, Fryderyk Franciszek) | 子犬のワルツ op.64、幻想即興曲 op.66 |

ヴァイオリン独奏曲

| 作曲者名 | 作品名 |
|------------------------------|-----------------------------|
| グリーク (Grieg, Edvard Hagerup) | ソナタ3番 |
| ベートーヴェン | ソナタ第9番「クロイツェル」、ソナタ第7番 op.30 |
| サラサーテ (Sarasate, Pablo de) | チゴイネルワイゼン |
| ブラームス | ソナタ1番 op.78 |

アンサンブル

| 作曲者名 | 作品名 |
|-----------------------------|---|
| ベートーヴェン | ピアノ四重奏曲 op.16、ピアノ三重奏曲全4曲 |
| シューベルト | ピアノ五重奏曲「鱒」 op.114 |
| シュポア (Spohr, Ludwig (Luis)) | 八重奏曲 op.65 |
| ハイドン | セレナード、弦楽四重奏曲第1・20番 |
| メンデルスゾーン | 弦楽四重奏曲第3番 op.44-1、ピアノ三重奏曲第1番 op.49 |
| モーツァルト | 弦楽四重奏曲 op.157、ピアノ クラリネット ヴィオラのための三重奏曲第2番 op.14-2、おおイシリスとオシリスよ |

4. おわりに

板東俘虜収容所は、久留米、習志野とともに1000名規模の俘虜を収容し、活発な音楽活動を展開してきた。そしてその活動期間はわずか2年半ほどであったが、表現したい欲求に基づいて彼らの身近な(時代的・地域的)な音楽を取り上げていった。20世紀前半期の活動が徳島と

いう一地方で、しかも市民にも提供されていたことは、日本における西洋音楽導入のもう一つのベクトルが存在していたことを物語っている。徳島県教育委員会文化財保護課は、このきわめて重要な印刷物の県指定をすることによって、日本におけるドイツ軍俘虜の文化を有形文化財として指定し全国に発信したのである。ただ、この指定に至るプロセスには、鳴門市とドイツ館のなみなみならぬ苦闘があったことは想像に難くない。ドイツ文化を吸収した結果として、音楽、スポーツばかりでなくバウムクーヘン、ソーセージ、パン^(註19)など食文化の製造技術の獲得をはじめ、その後の日本文化に与えた影響は数多い。また日本在住のドイツ人が青島で俘虜となり収容されたことは、ドイツ語の通訳としての役割をはたしたばかりではなく、異文化理解にも大きく貢献した。解放後、元の職場への復帰や大学教授となり日本で生涯を全うした俘虜もいた。ドイツ軍俘虜が日本の「戦陣訓」とまったく違った境遇に置かれたことも文化活動を展開するうえで効果的であった。給料が支払われ、昇任すら行なわれていたことも当時の日本と比較すると驚きに値するものであったことであろう。

俘虜がドイツ皇帝への崇拝のため誕生祝賀会や記念演奏会を催したことは、天皇制国家である当時の日本では本来不可能であったことと思われたが、これも実施されている。ディルク・ギュンター（Dierk Günther）は「ドイツ人俘虜たちは自分の母国への気持ちと誇りを遠慮せずに表現していました。収容所内で開かれたコンサート・演劇・講演会は、それを通じて祖国への愛を持ち続け、いつかやってくる自由の日までへこたれずにやっていく手助けをしようとして開催されました」^(註20)と述べており、音楽をはじめとする文化活動は、俘虜たちにとって大きな支えであった。

本稿の執筆に関して、鳴門市ドイツ館館長の川上三郎氏からプログラム資料の提供や貴重なご意見をいただいたことに感謝するとともに、現在精査を続けている鳴門市ドイツ館に御礼申し上げます。

本稿の一部は「ドイツ軍俘虜収容所における音楽活動の横断的・総合的研究－音楽活動記録の作成（平成22年度科学研究費補助金・基盤研究(C)（一般））」に基づくものである。

注釈・参考文献

[注釈]

1. 統合6収容所は以下の表の通りである。

([http://homepage3.nifty.com/akagaki/\(4\)syuyosyo.html](http://homepage3.nifty.com/akagaki/(4)syuyosyo.html)) を基に岩井構成

| 地名 | 開所年月日 | 閉鎖年月日 |
|-----|-------------------------|----------|
| 久留米 | 大正3年10月6日（熊本、福岡統合） | 同9年3月12日 |
| 名古屋 | 大正3年11月11日 | 同9年4月1日 |
| 習志野 | 大正4年9月7日（東京、静岡、大分、福岡統合） | 同9年4月1日 |
| 青野原 | 大正4年9月20日（姫路より移転） | 同9年4月1日 |
| 似島 | 大正6年2月19日（大阪より移転） | 同9年4月1日 |
| 板東 | 大正6年4月9日開所（徳島、丸亀、松山統合） | 同9年4月1日 |

2. 鳴門市ドイツ館『Die Barake—Zeitung für das Krirgegefangenenlager Bando, Japan』Band I—IV 鳴門市ドイツ館 2006年。
3. 掲載番号は印刷物としてカウントしているため、重複しているプログラムも存在している。
4. 岩井正浩「四国3収容所におけるドイツ軍俘虜の音楽活動」
藤井知昭・岩井正浩編『音の万華鏡 音楽学論叢』岩田書院 2010年 pp.7-35。
5. 平凡社『音楽大事典』1982年 p.208参照。
6. ハンゼン (Hansen, Hermann Richard)=海軍膠州派遣砲兵大隊第3中隊軍楽隊隊長・軍楽兵曹)。1886年生。港湾都市シュテンティンで音楽教育を受け、1904年海軍に入隊、徳島収容所、板東収容所での「徳島オーケストラ」を指導した。なお、1918年の第24演奏会から名称を「M.A.K オーケストラ」(Matrosen-Artillerie-Detachment Kiautschou 膠州海軍砲兵大隊)と変更している。富田弘氏は『板東俘虜収容所』(財団法人法政大学出版会2006年 p.167)の中で、『ディ・バラック』執筆者Mのコメントを引用して次のようにハンゼンについて称えている。

「収容所のなかでもっとも功績があり、またこう言ってもいいのだが、もっともみなに好かれていた人物の一人である」ハンゼンがこの人たちと共に去った。「ハンゼンがMAK楽団の主宰者として全体のために果たしてきた、たゆまぬ活動に対して、収容所全体の感謝の気持ちはわれわれの収容所の先駆者が」、八月二十五日のさよなら演奏会のときに述べたことばや拍手、彼に対してはみんなが心からの別れの挨拶をしていたことから、明らかである。

ハンゼンの活動は、小収容所であった徳島で小規模な形ではじまり、「今日の堂々たる姿に至るまでの発展の様子はわれわれ自身が共に体験してきたし」、徳島から板東に移ったハンゼンが後から合流した人たち、すなわち「労苦と二年にわたる災難に疲れた松山と丸亀の戦友たちを、板東の門の所でプロイセン行進曲で迎えた日」(岩井註：板東に統合された日)がその初めだった。

ハンゼンは、1919年8月25日に「ハンゼン楽長指揮の最後の演奏会」を開催し、翌26日に板東収容所を後にして帰国、その後も音楽活動も続け1927年に死去。

7. エンゲル (Engel, Paul)=ヴァイオリニスト、指揮者。《青島の戦士》や《シュテッヒャー大尉行進曲》を作曲。エンゲルについて瀬戸武彦氏は次のように論じている。

海軍歩兵第3大隊第7中隊・2等歩兵。[上海居留地工部局音楽隊員]。ヴァイオリン奏者。隊長はハンス・ミーリエス (Milies) であった。1914年12月15日、在上海総領事から外務大臣に、上海租界の代表から、指揮者ミーリエスとその楽団員であるエンゲル、ガーライス (Gareis) 及びプレフェナー (Pröfener) は非戦闘員なので解放せよ、と申し入れがあるとの親書が出されたが、軍籍があることから不許可になった。丸亀時代の1915年に「エンゲル・オーケストラ」を結成した。1917年板東に移された後、松山からの俘虜を加え団員は45人になった。1番札所の靈山寺等で練習し、やがて遍路宿で地元の青年達に楽器のてほどきをした。板東では17回の演奏会、3回のシンフォニー、2回の「ベートーヴェンの夕べ」で指揮を執った。松江豊寿所長の理解もあって徳島市内で出張指導をするようになり、「エンゲル音楽教室」とも言えるものを開設した。当初場所は公会堂であったが、やがてメンバーの一人であった立木真一の自宅、立木写真館の2階に練習場を移した。エンゲルの帰国に際しては、徳島の一流料亭「越後亭」で何度も送別の宴が開かれた。(「青島(チンタオ)をめぐるドイツと日本(4) 独逸俘虜概要」高知大学学術研究報告 第50巻(2001

年) 人文科学編 p.73)

エンゲルは、上海工部局管弦楽団で第一ヴァイオリン主席・副指揮者となった。後に習志野収容所で楽団を指揮したハンス・ミリエスや、久留米『収容所楽団』で指揮者として活躍したオットー・レーマンとは違って、音楽学校で正規の音楽教育を受けていないにも関わらず、ヴァイオリンをはじめとする音楽的技量は優れていたと推測される。

8. シュルツ (Schulz, Adolf) = 海軍歩兵第3大隊第5中隊・伍長。板東時代、公会堂での工芸品展にブランド (Brandt) と共同でチェロを制作・出品した。松山→板東。前掲註9 p.120。
さらにエンゲル・オーケストラ第3回 (通算26回) コンサート・プログラム紹介の後には、ラッパ手シュルツがクラリネット奏者として加わったことが記されている。彼はさらにオーボエも奏している。(『ヘルマン・ヤーコプ：エンゲル・オーケストラ その生成と発展1914-1919 p.88-89) このように複数のしかもジャンルの違う楽器を奏することは、上海音楽院では一般的だったと榎本泰子氏は論じている。(榎本泰子『上海オーケストラ物語』春秋社 2006 p.45) 日本でも明治初期における洋楽移入期に宮内省式部寮雅楽課が西洋音楽を演奏し、現代もジャンルの異なる複数の楽器を奏している。
9. モルトレヒト (Moltrecht, Paul) = 海軍歩兵第3大隊第2中隊・軍曹。板東時代、収容所内に「モルトレヒト合唱団」(60名) を結成して指揮者を務めた。1917年5月26日、マンドリン合奏団第1回コンサートを開催した。丸亀→板東。瀬戸武彦「青島をめぐるドイツと日本(4)」『高知大学学術研究報告人文科学編』50巻 (2001年) p.107。
10. ヤンセン (Janssen, Peter) = 海軍歩兵第3大隊第7中隊・予備伍長。板東時代、収容所合唱団の指揮者を務めた。丸亀→板東。前掲註9 p.89。
11. 前掲註4 参照。
12. Bohner, Hermann = 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。宣教師。1914年にエルランゲン大学で哲学博士号取得。帰国後再度訪日し、大阪外国語大学講師、教授を歴任。神戸再度山に眠る。松山→板東。瀬戸武彦「青島をめぐるドイツと日本(1)~(5)」『高知大学学術研究報告人文科学編』50巻 (2001年) p.66。
鳴門市ドイツ館『Die Barake—Zeitung für das Krirgegefangenenlager Bando, Japan』Bd. II 2. Juni 1918 No.10 (36) Zu Beethovens 9. Symphonie (Schiller-Beethoven-Goethe) Bd. II 9. Juni 1918 No.11. (37) Zu L. van Beehtovens Neunter Symphonie Schiller-Beethoven-Goehte) II. Teil. 2006年。
13. Meissner, Kurt = 海軍歩兵第3大隊第6中隊・2等歩兵。日本語が堪能で、松山大林寺での収容所講習会では日本語講師も務めた。板東収容所からも『日本人におけるドイツ人の歴史』をはじめ3冊の日本語著作を出版している。松山→板東 前掲註7 p.104。
14. Ramseger, H = 神戸の貿易商で、甥のラーン (前述) がオーケストラに関わっていたこともあり板東の音楽活動に多大の尽力を行った。自身も交響詩『忠臣蔵』を作曲、エンゲル・オケで演奏されている。

15. 鳴門市ドイツ館『どこにしようと、それがドイツだ 改定版』鳴門市 2003年 p.19。
16. 前掲註4 p.25。
17. 鳴門市ドイツ館『Tokushima-Anzeigaer』No. 15. III Bd. Tokushima 20. Aug. 1916
Zum fünfzigsten Konzert unserer Kapelle。
18. 前掲註12。
19. たとえば神戸にゆかりのある俘虜たちに以下の人々がいた。
バウムクーヘンのカール・ユーハイム (Juchheim, Karl 1889-1945)=22歳にドイツの租借地であった青島でジータス・ブランベルグ経営の喫茶店に就職。翌年自らの喫茶店「ユーハイム」を開店。
カール・ビュティングハウス (Buttinghaus, Karl ?-1944)=日本女性と結婚し1924年に東京で最初のソーセージ工場・店。後に神戸に進出、44年に死亡し、45年に空襲で店舗焼失。
ハインリッヒ・フロイントリーブ (Freundlieb, Heinrich 1884-1955)=愛知県半田町の敷島製粉(後のパン)に技師長として迎えられる。その後神戸北野に「ジャーマン・ホーム・ベーカリー」を開店。NHK・TV「風見鶏」に登場する。
20. 『青島戦ドイツ兵俘虜研究所研究』第7号 青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究会 2009年12月 p.46。

【参考文献】

- 平成19年度第3回徳島県文化財保護審議会『議事資料』 2008年3月14日
- 徳島県文化財保護課『板東俘虜収容所に関する資料台帳』 2008年
- 鳴門市ドイツ館『どこにしようと、それがドイツだ 改定版』 鳴門市 2003年
- 鳴門市ドイツ館『Die Barake—Zeitung für das Krirgegefangenenlager Bando, Japan』Band I—IV 鳴門市ドイツ館 2006年
- 鳴門市ドイツ館『Tokushima-Anzeigaer』No.1. I .BD.1.April 1915～No.17. III. BD.17 Sept. 1916
- 鳴門市ドイツ館「和洋大音楽会番組」(和洋演芸会番組) 1919年3月 板東俘虜収容所印刷所
鳴門市ドイツ館所蔵
- ヘルマン・ヤーコプ：エンゲル・オーケストラ その生成と発展1914-1919
(Das Engel-Orchester Seine Entstehung und Entwicklung 1914-1919) 富田弘訳 未公開
資料 鳴門市ドイツ館所蔵
- 鳴門市史・中巻「音楽活動」 鳴門市 1982年
- 棟田 博『桜とアザミ—坂東俘虜収容所』 光人社 1974年
- 林 啓介訳『板東俘虜収容所詩画集 鉄条網の中の4年半』 井上書房 1979年
- 鳴門教育大学社会系教育講座、芸術系教育講座編集発行『板東俘虜収容所研究』 1990年
- 林 啓介『第九の里 ドイツ村』 井上書房 1993年

榎本泰子『楽人の都・上海』 研文出版 1998年

青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究会『青島戦ドイツ兵俘虜研究所研究』創刊号～7号 2003年12月～2009年12月

瀬戸武彦『青島をめぐるドイツと日本(1)～(5)』高知大学学術研究報告 人文科学編 第44巻(1995年)／48巻(1999年)／49巻(2000年)／50巻(2001年)／52巻(2003年)

榎本泰子『上海オーケストラ物語』 春秋社 2006年

富田 弘『板東俘虜収容所』 法政大学出版会 2006年

富田 弘「板東俘虜収容所における俘虜の音楽活動」(鳴門市ドイツ館所蔵) 一収容所新聞『バラッケ』の記事及び音楽会プログラムの編集、翻訳、解説

田村一郎『板東俘虜収容所の全貌』 朔北社 2010年

[資料]

3. 徳島オーケストラ第2回シンフォニー・コンサート(通算第18回)

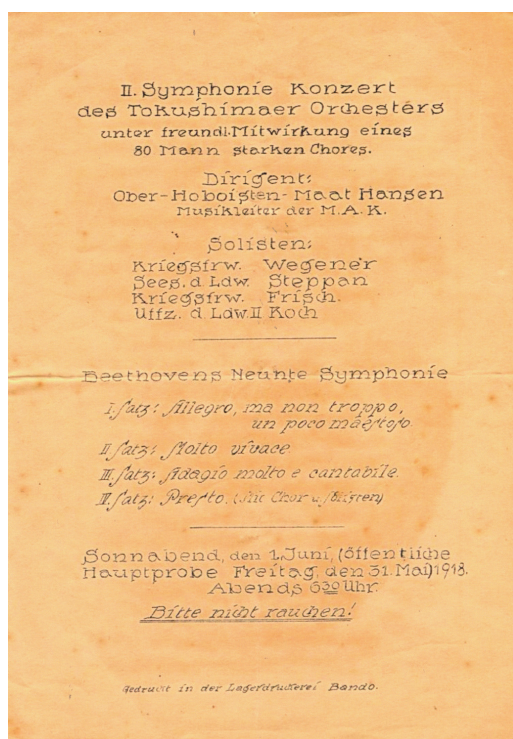
ベートーヴェン第9交響曲初演ポスター [鳴門市ドイツ館所蔵]

4. 徳島オーケストラ第2回シンフォニー・コンサート(通算第18回)

ベートーヴェン第9交響曲初演プログラム [鳴門市ドイツ館所蔵]



[資料-3] ベートーヴェン第9交響曲初演ポスター [鳴門市ドイツ館所蔵]



[資料-4] ベートーヴェン第9交響曲初演プログラム [鳴門市ドイツ館所蔵]